

長野大学リモート講義

「信州上田学B」 後学期
青年たちの手で学び舎をつくり、
文化的地域をつくってきた歴史に学ぶ

上田小県近現代史研究会 小平千文

講義を前に

- みなさんこんにちは。ご紹介にあずかりました小平千文です。長野大学では、近現代史(日本史A)と地域史(日本史B)授業で14年ほどお世話になりました。今回はリモート講義になりますが、よろしくお願いします。
- なによりもご入学おめでとうございます。
- 残念なことは、新型コロナウイルス感染により大学登校ができていないようです。
- 願うことは、長野大学を抱える上田小県地域の青年たちが、新しい文化や教育など文化的地域を産み出し県内外に発信したその息吹(活動力)の歴史に学び、新しい地域づくりの先頭に立っていただけることを願っています。
- これからの話がその一助になれば幸いです。

本論に入る前に

これからお話したいことの骨格が、
1997年発行された『長野大学三十年誌』（以下、
『三十年誌』と略称）の冒頭の一節に要領よくま
とめられています。

少し長いですがそれを読みながら本論に入っ
ていきたいと思います。

信州の学

塩田平

「信州の鎌倉」と呼ばれる塩田平（長野県上田市塩田地区）一帯は、式内社生島足島神社、塩野神社をはじめ、中世の国宝安楽寺八角三重塔、重文の中禅寺薬師堂、常楽寺石造多宝塔など数多くの文化財が点在する文化の香り高い地域である。鎌倉時代には、鎌倉幕府の重臣北条義政が前山の弘法山麓に塩田城を築き、東信濃の政治の中心となった。また中世の名僧無関普門が、一二年にわたる入宋求法の旅から帰国して、一時この塩田に身を寄せたとき、「塩田は信州の学海なり」という言葉を残した。まさしく塩田平は、政治・文化の一大中心地であった。

さらに近代に入っては、上田・小県地方は、大正デモクラシー運動の牙城とも呼ばれるように、山本鼎が提唱した自由画教育と農民美術運動、また土田杏村やタカラ・テルらによる上田自由大学運動がおきた。さらに青年団による各地域の『時報』と呼ばれる新聞の発行など、新しい知識を自らの手で吸収し、世界の文明の導入に献身する多くの先進的青年たちを生み出した。

特に上田自由大学運動は、大正十年（一九二一）十一月、恒藤恭による法律哲学の講義から始められた。この運動の出発は、小県郡神川村の金井正と山越脩蔵の二人の青年が、在野の哲学者土田杏村を講師に「学問を総合的に勉強のできる機関を組織」しようということから始まった。民間の手による教育機関の設立として、この自由大学は「民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学」であると位置づけ、中農層の農村青年や小学校教員の参加がみられた。講師には、哲学概論の土田杏村、法律哲学の恒藤恭、文学論のタカクラ・テル、社会学の新明正道など、当時新進気鋭の学者が招かれ、きわめて高度な講義が行われた。この自由大学運動は、その後飯田に信南自由大学、松本に松本自由大学が開講されるなど、県下をはじめ新潟県などの地方都市に波及していったのである。大正デモクラシーの記念碑的な存在として、この自由大学運動は歴史上、特筆される文化運動であり、それが上小地域から湧きおこったことを忘れてはならない。

こうした文化的な歴史土壌をもったこの地域に、小県郡塩田町（現上田市塩田地区）が、大学を招致しようと考えたのは、「信州の学海」と呼ばれた誇りある精神文化の再興と民衆教育という伝統を守ろうとする意図があつたと考えられる。そして地域の経済的社会的発展を促す上にも、大学の創設はきわめて意義深い事業であると考えられたためであつた。

『三十年誌』の弁

1 長野大学設立地域の特徴

- 「信州の鎌倉」、「信州の学海なり」と呼ばれている地域
「日本遺産 レイラインがつなぐ『太陽と大地の聖地』～龍と生きるまち 信州上田・塩田平～」(2020.6.19 文化庁認定)
- (目的)文化財を積極的に活用して地域の活性化につなげる
-

2 近代の上田・小県地域の特徴

- 「大正デモクラシー運動の牙城(中心)」
- 青年たちが産み出したさまざまな事業
- (1) 『時報』(おらが村の新聞)の発行(1919・大正8.2～)
- (2) 児童自由画運動(1919.4.27-28)
- (3) 農民美術運動(1919.12.5)
- (4) 信濃黎明会(1920.10.2)
- (5) 信濃(上田)自由大学運動(1921.11.1～)

- 前半は(1)～(5)を、後半で信濃・上田自由大学を取り上げる

「信州の学海なり」

- 無関普門(むかんふもん)の業績の記録
- 「塩田は“信州の学海”といわれるところで、勉強に志すものは、みなここにやってきた」という意味のことが記されている(『信州の鎌倉塩田平の文化と歴史』1983年)
- 「学海」とは、「勉めてやまず遂に研究を成就すること」・「学問の広大なことを海にたとえた語」(『広辞苑』)

1 長野大学のあゆみ(54年間・半世紀余)

- 1966年(昭41)4月 本州大学として開学
- (塩田町の地域開発のための誘致)
- 1967年 4月 本州女子短期大学開学
- 1972年12月 本州女子短期大学は上田女子短期大学として分離
- 1974年4月 長野大学に改称
- 2017年(平29)4月
- 公立大学法人長野大学発足

2 青年(若者)たちが産み出した さまざまな事業

- (1) 『時報』(おらが村の新聞)の発行
- (『時報』発行の特徴)
 - 青年会・青年団が編集した
 - 村は印刷費等の補助はするが編集への口出しはしない
- 1919・大正8.2『塩尻時報』の発行～
- 1921.5.25創刊の『青木時報』は、各村の『時報』発行に大きな影響を与えた。
- →「知る権利」の主張 編集長栗林一石路
- 発行は、小県郡下全1市34町村で発行
- 長野県1、全国1の発行数

[illegible]

『青木時報』創刊の辞

創刊の辞

人間が共同生活をしてゐる以上、自己の生活が社會に影響し、社會の事象が自己の生活に關聯してゐる事はいふまでもない事である。

だから、自己の生活と、社會の生活とを調和せしめ、兩々相伴つて進展せしめるためには、互の理解と愛とがなければならぬ。

『村』は、一つの社會生活を形つてゐるものであると同時に、傳統的にも、行政上においても、最も自己に近い自治体である。自治とはいふまでもなく自ら治める事である、勿論行政上に於いては國家の委任政治を行ふけれども、それは實は、村自身の生活のために自分の仕事として、行ふてゐるのである。

吾々は、自己の生活をよりよくするため、先づ最も近い社會生活の團體としての村に愛さねばならない、理解せねばならない、理解するためには知る事である、理解せしめるには知らせる事である。茲に吾々青木會が青木時報を発行するのは、その仲介機關たらんためである。

どうぞ、村當局も、議員も、一般村民も、分に本紙を利用して頂きたい。

かくして、本紙のます／＼正しく育つてゆく事は、常に吾人青年會のみの喜びではないと信じるのである。

(2) 児童自由画運動(1919.4.27-28～)

- ・提唱者

画家の山本鼎(岡崎市 37歳)

主流であった臨画(手本を見て絵を習う)教育に対して現在の絵画教育
＝自由画を提唱した

- ・自由画とは、

「児童自由画展覧会趣意書」

1919.3 →県内外に発展

- ・賛同・推進者

神川村の金井正(33歳)・

山越脩蔵(25歳)



山本鼎 (1882～1946年・上
田市山本鼎記念館提供)

金井正(1886-1955)



金井 正の書齋



山越脩蔵(1894－1990)



小県郡神川尋常高等小学校

225 児童自由画展覧会

その一 趣意書

大正八年三月

『児童自由画展覧会趣意書』 上田市 山本鼎記念館所蔵

児童自由画展覧会趣意書

従来、各小学校で行はれた児童の絵画教育は、大体、臨画と写生の二方法であります。此処に私が「自由画」と称へるのは、写生、記憶、想像を含む——即ち、臨本によらない、児童の直接な表現を指すのであります。

従来の教導によりますと、児童は、粗悪な印刷に附せられた大人（それも多くは下手な画家がぞんざいに描いたもの）の画を模写する時間が、自然から直接に形なり彩なりを汲み取る時間よりも多いのであります。これはいけない事と思ひます。

何故ならば、臨本に示された一本の下らない線が、一本の美しい活きた樹木の線と同じ力を以て児童の頭に働きかけるからです。彼れ等は、どんなものをも正直に模倣するのです。ですから、いぢけた臨本を与へれば、児童の眼と手は、其通りいぢけてしまいます。児童の眼を豊富な自然界の方へ誘へば、彼れ等の心と手は生き／＼として来るのです。これは、学齡期前の児童の画が大概活躍したものである事がよくそれを証明して居ます。

大体、児童の画に、大人のやうな観照力を奨める事は間違つた事で

8 333
明治 43 年
大正 4 月
昭和 23 日

尋常小學

新定畫帖

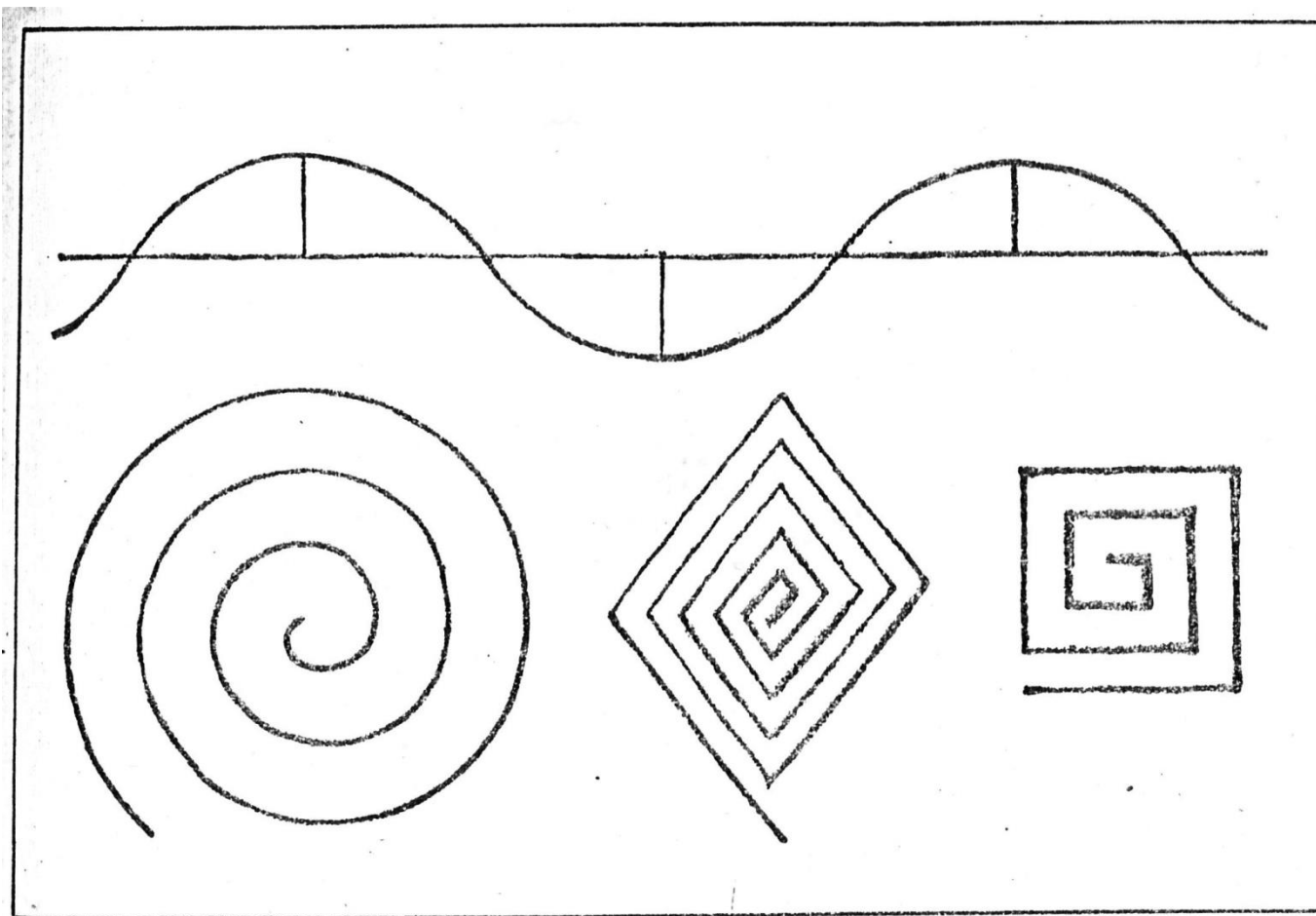
第三學年

兒童用

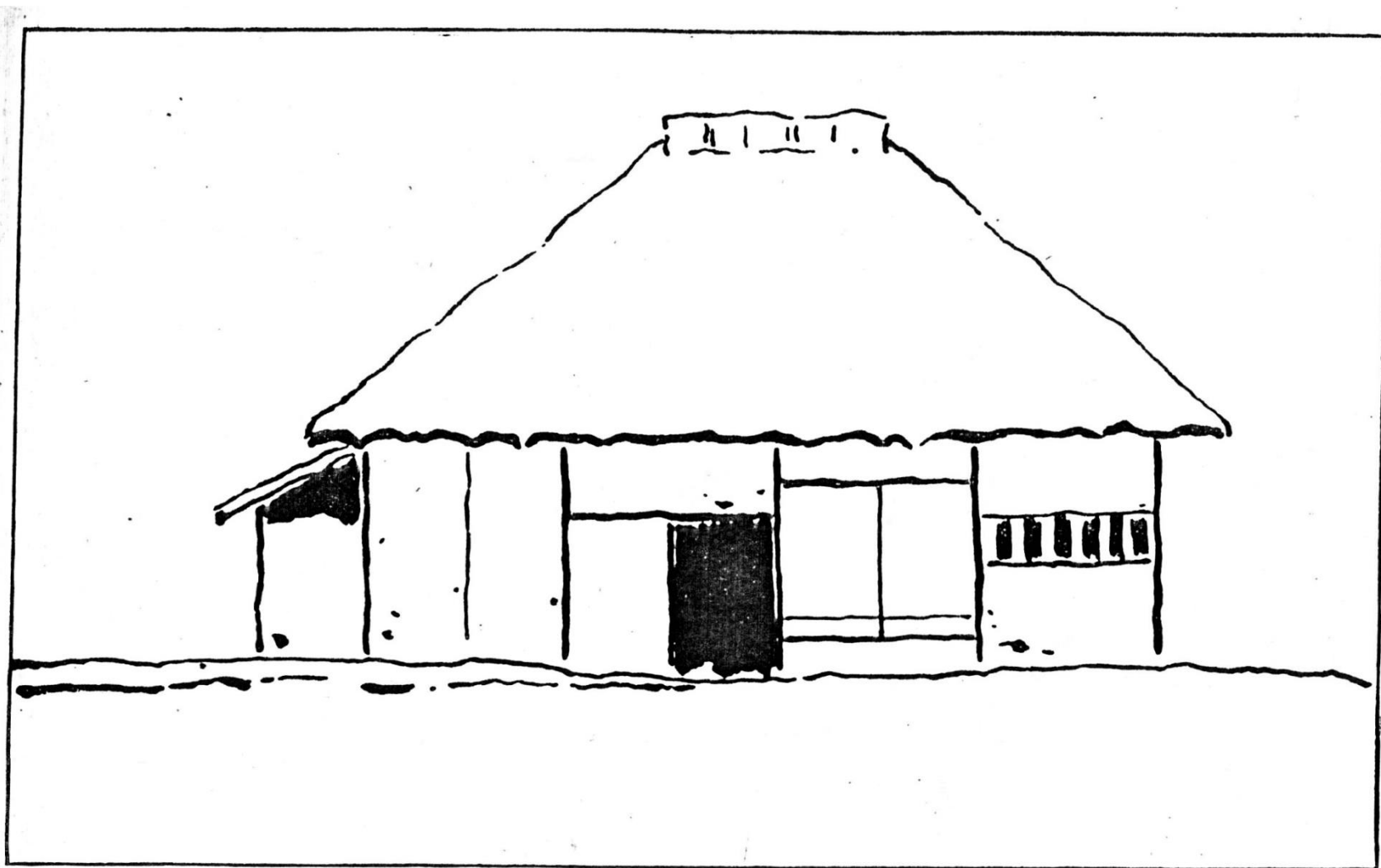
文部省

教育參考室
第 10 圖

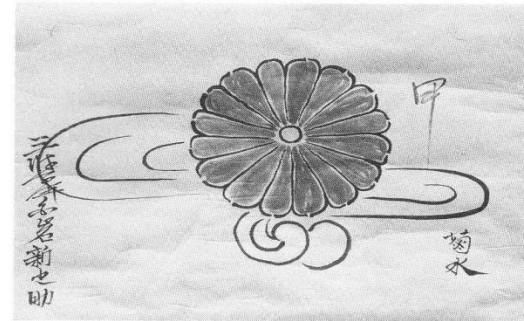
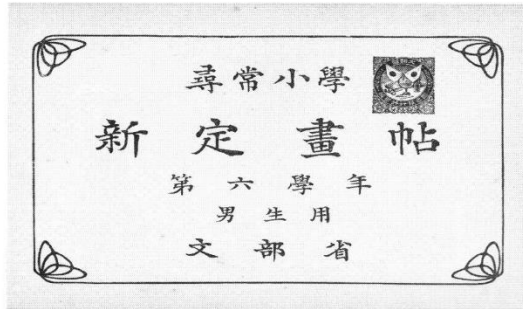
手本 (3年生)



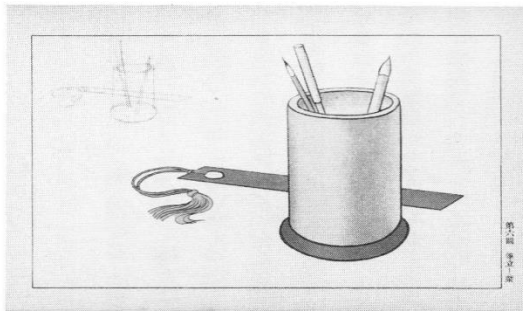
手本(3年生)



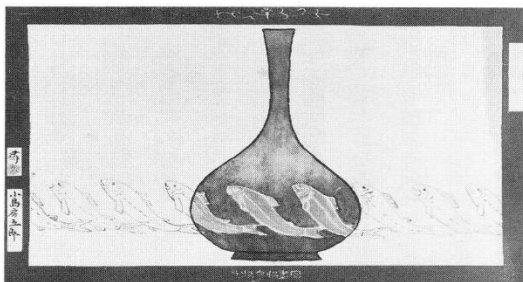
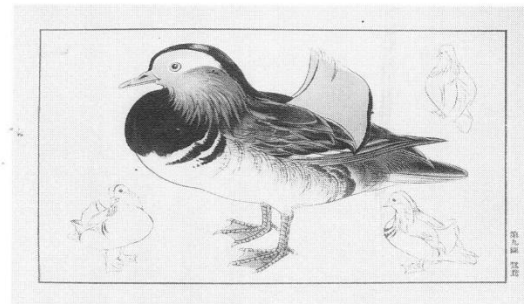
『新定画帖』(6年生)



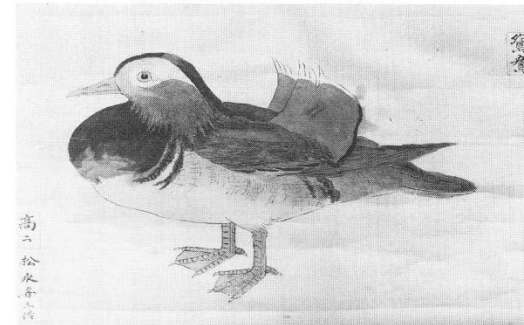
臨画「菊水」 兵庫県 高等科3年 1900年



上は『新定画帖』第六学年男生用・扉 1911年
下は同書第六図 筆立と槌



『新定画帖』考案画 上雲寺小学校尋6 1913年



上は『毛筆画帖』掲載の図版
下は『毛筆画帖』模写 上雲寺小学校高等科2年 1916年

第1回児童自由画展覧会入選作品

神川尋常高等小学校3年生 山越元浩





諏訪・岡谷にまで波及した児童自由画運動(平野尋常高等小学校5年生の作品 1933年ころ)

農民美術建業之趣意

農民美術、PEASANT ART は何れの国にもあるが、是れを現に、組織的に国家の産業として奨励して居るのは露西亞である。其製作品は広く欧米に輸出せられて逐年其額を加へ、PEASANT ART IN RUSSIA の名は今まさに、美術的手工品及手工的玩具の市場に首座を占めて居るのである。

農民美術とは、農氏の手によつて作られた美術工芸品の事であつて、民族的若くは地方的な意匠、——素朴な細工——作品の堅牢、等が其特長とせらるゝのである。

日本にも農民美術と称す可きものが昔から、各地にあるにはあつたが、其製作上の方針が頗る消極的で、何等の産業的組織も、美術的奨励もなかつたために、段々製作品の美的価値が低下して、終に機械力に圧倒されて衰亡してしまつたものが多く、今日では、外国に対して PEASANT ART IN JAPAN と名づく可き何ものも無いのである。

(3) 農民美術運動

1919.12

- 提唱者 山本鼎
- 賛同・推進者 金井正、山越脩蔵
- 1919.11山本鼎・金井正連名で出された「農民美術建業の趣意書」
- 1919.12.5 第1回講習会(神川尋常高等小学校)
- 1人(中村 實<実>)からスタート
(第1期講習会修了者 男7人、女14人)
- 1921年「蒼い屋根の工房」→ 1923年日本農民美術研究所を設立(大屋地籍 1939年閉鎖)

山本鼎のデッサンと講習会風景

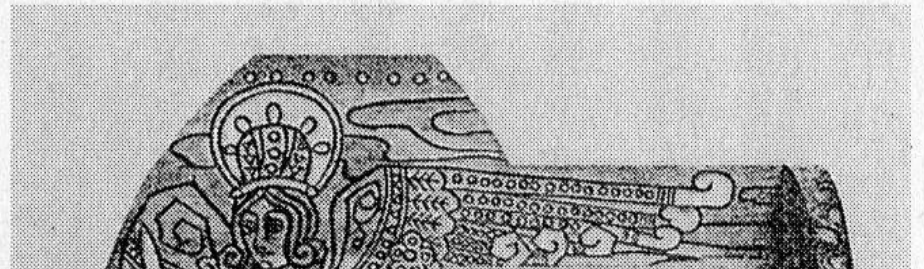
長野県農民美術連合会 「山本鼎と農民美術」より



農民美術の風俗人形のためのデッサン 山本鼎



農民美術研究所の第一回講習会風景 左から
山本鼎、山崎省三、金井正、村山桂次、中村
実、山越茂重郎、有賀潔



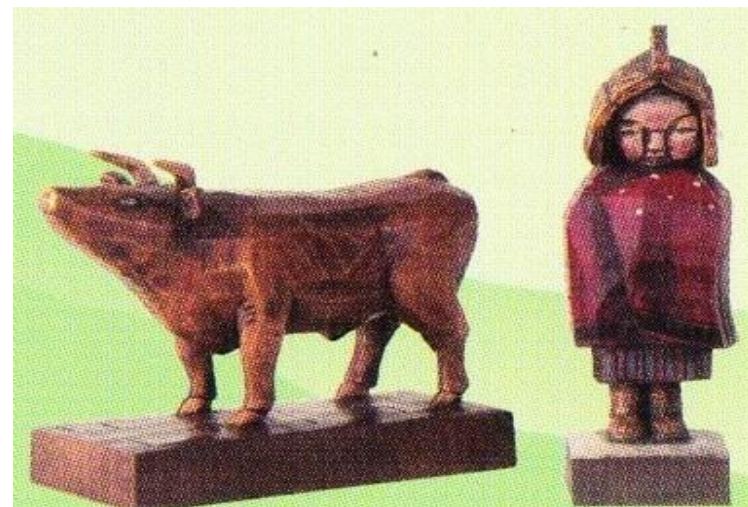
日本農民美術研究所と作品



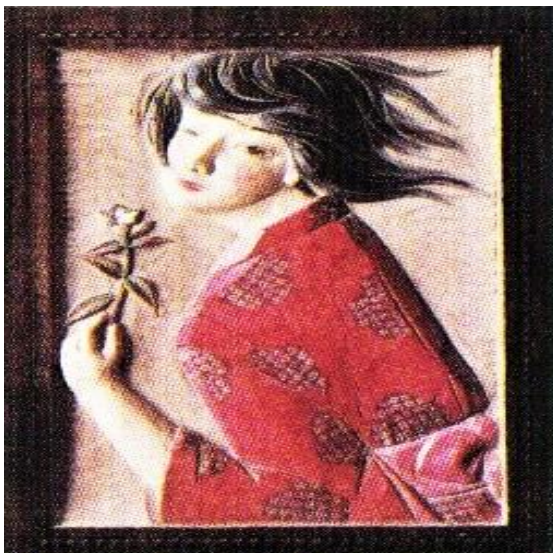
5

農民美術研究所跡

(山本鼎記念館所蔵)



中村実



7

清水義博



16

工藤裕

(4)信濃黎明会

1920.10.2

(貼付資料)

信濃黎明会綱領

一、世界ノ文化的大勢タル人類解放ノ新氣運ニ協調シ人類ノ自己実現ヲ尊重ス

一、吾人青年ハ真理ト正義トノ使徒タルコトヲ確信シ現代日本ノ正当ナル改造運動ニ参与ス 以上

現在會員(九月廿八日迄)

入山越信藏

長瀬村 池内清雄 塩尻村 沓掛喜 県村 佐藤孝之

城下村 中沢守平 神川村 村山修三 川辺村 小林泰一

中塩田 福沢三郎 県村 柳沢宇一郎 東塩田 宮原正徳

傍陽村 半田蔵七 青木村 栗林農夫 殿城村 金子好

依田村 田村九八郎 和村 竹内 郎 本原村 清水良平

本原村 清水実 長村 青木長寿 傍陽村 松沢末一郎

武石村 柳沢賢次郎 神科村 塚原彦太郎 富士山 室賀秀四郎

浦里村 宮下 周 上田市 猪坂直一 傍陽村 小林清志

川辺村 山浦捨人 川辺村 手塚儀一 上田市 松前七五郎

27人
以上

(順序不同)

小林泰一(1896~1929)、吉野作造(1873~1933)



大正5・6年ごろ

長野縣小糸郡
川邊村
小林泰一様

前書 之般由未示件多忙に在り申越す
川中村に在りし中村村の馬屋に在りし
と日知書と在りし中村村と連繋と在りし
此と在りし中村村と連繋と在りし中村村
草と在りし中村村と連繋と在りし中村村
中村村と連繋と在りし中村村と連繋と
中村村と連繋と在りし中村村と連繋と

中村村と連繋と在りし中村村と連繋と

中村村と連繋と在りし中村村と連繋と

中村村

中村村

- 東京帝大・新人会綱領(1918.12結成)
- 一、吾(わが)徒(かち)は世界の文化的大勢たる人類解放の新気運に協調し之が促進に努む
- 一、吾徒は現代日本の合理的改造運動に従ふ
- 信濃黎明会の活動目標
- 一、普通選挙実現、清らかな選挙
- 一、軍備縮小

(5) 信濃(上田)自由大学運動 (1921.11.1～)

- 1 3期に分けられる運動の経過
 - 1期 1921(大10).11.1～1926.3.26
 - 2期 1928(昭3).3.14～1930.1.26
 - 3期 1945(昭20).12.27～1946.11.10
- 2 提唱・推進者 山越脩蔵
- 3 協力・推進者
 - 土田杏村 金井正 猪坂直一

信濃自由大学提唱者山越脩蔵の思い

山越脩蔵「土田杏村の手紙と上田自由大学」

『信州白樺』NO.29 1978年

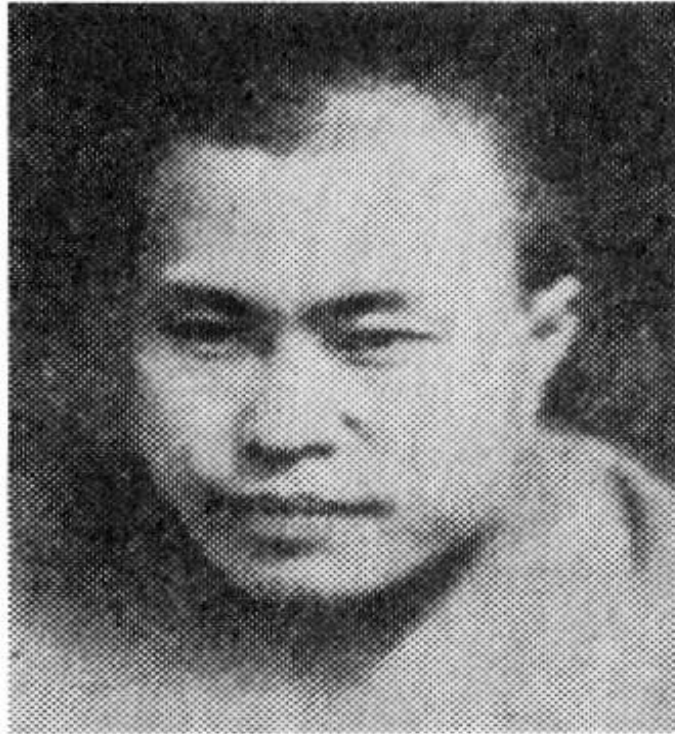
この選挙にかかわって自分の行動について反省することがあった。それは普通選挙制度が実施される時代が来た場合に、折角勝ち得た選挙権を、拡張された選挙民がはたして選挙権を有効に行使出来るまでに成長し得るかどうかの疑問であった。これは一朝一夕になし得る問題ではなからう。あるいは永久な課題ではないか。そう思うと、それに対する対策も考えねばならない。

そこで選挙運動中に、信頼における指導者を求め、選挙区内の数ヶ所で講演会を開催し、現在の政界や将来への展望と有権者の態度とでもいうような話を聴くのも大切なことではないかと考えた。

そのとき念頭に、土田杏村が浮んだ。個人雑誌「文化」とか著書の「象徴の哲学」、哲学研究、改造、中央公論などの、多方面にわたる、評論、論説や哲学的な研究など、当時の評論家と規を一にしない、多面的な研究に敬服していた。しかも少壮で将来を期待していたからだ。そこで杏村の意見や都合を伺うことにした。大正九年四月はじめ頃であった。四月中ごろ杏村から断りの電報が届いた。

止むを得ないこととあきらめるとともに自分の失礼な無遠慮な行動に対して当然であると反省した。然し数日後、四月十九日付けの長文の書翰が届けられた。

土田杏村(1891-1934)



35歳の杏村（大正
15年11月）

（上田敏郎著『土
田杏村と自由大学
運動』より）

土田杏村の考え

自由大學雜誌

第一卷第一號

大正十四年一月發行

自由大學へ……………	土田杏村……………(一)
忘れられたる花籠……………	新明正道……………(五)
露西亞文學研究(一)……………	高倉輝……………(八)
農村教育調査會の決議……………	杏……………(一六)
上田自由大學の回顧……………	猪坂生……………(一七)
パンフレットより……………	(一九)
賣れない本と作家と金と……………	(二二)
自由大學彙報……………	(二三)
講師消息……………	(二三)
新刊紹介……………	(二四)

發行所 自由大學協會

日本の自由大學は何處の國の教育機關の模倣でも無い。恐らくは現在でも自由大學の會員諸君の中には、此れと類似の教育機關が世界の何處かに存在する事を知らないで居るものがあらう。併しさうした人でも僕達の自由大學の目的を爲事だけははつきり知つて居る。自由大學は全く僕達會員の要求の中から出たものだ。其の組織、方法など、此れ亦同じく僕達の事情に相應するやう、僕達によつて案出せられたものだ。其れは何處の國からの借り物でも無い。(中略)

々を詳しく解題してあるのを讀んで、全體の展望を得た事を悦んだ位のものである。其れ程僕達の自由大學は手製の國産品である。「自由大學」の名稱も上田の諸君の案出したもので、僕などの造語では無い。此んな名ものが外國にあるか否かを僕は知らない。たゞタルドの著「社會法則」の序文にコレエジュ、リイブル、デ、

(中略)

自由大學は恵まれた學校だ。先づ其の講師の顔觸れを見るかよい。關東關西の少壯學徒の粹を集めて居るては無い。此れまで毎年來講してくれた人、此年から來講してくれる人、一寸考へて見たゞいても其れは確にすばらしい勢揃ひだ。哲學及哲學史、出隆君、佐竹哲雄君、谷川徹三君、僕、宗教哲學、佐野勝也君、佛教概論、金子大榮君、倫理學、世良謬男君、心理學、大脇義一君、法律學、恒藤恭君、經濟學、山口正太郎君、水谷長三郎君、社會學及社會思想、新明正道君、波多野照君、政治學、吉野作造博士、今中次麿君、文學概論、高倉輝君、富田碎花君、生物學、山本宣治君——さうさ此れだけ勢揃ひして見ても、何處に其んな俊秀揃ひの大學があるか。法文科大学といふものが雨後の筍の様に出來てから、人氣のある教授を集めるに骨が折れ二三の教授の外は營養不良でさもなくも旗揚げをしなけりばならなくなつた。だが今若し此れだけの勢揃ひで出來上つた法文科大学があるとしたら、其れこそは確に日本一の法文科大学だ。誰れが其れを否定しよう——然るに其の光榮ある法文科大学が僕達の自由大學なのでは無い。

僕達は此れからいろいろの事を計畫し、實行して行きたい。さしあつて特設せられた校舎や圖書館を欲し。アスコブ國民大學やリスリッゲ國民大學やの寫眞を見るさ、僕達も其んな校舎が欲しくなる。なほ行く行くは、此の大學と他の經濟組合、例へば生産組合、消費組合なさこの關係を密接なものにしたい。法文科、即ち我々の文化學科以外の實科本位の自由大學をも創めたい。なほ行くくは高等學校なさこの階梯を踏まず、自由大學を通つて何時でも、何年でも、在學の出來る、本當に民衆本位の單科大学をも創設したい。——そして我々は本當に學問を民衆のものにしたいのだ。學問を空氣の如く、水の如く我々の周圍に豐かにしたいのだ。今は學問の飢饉時代だ。學校は僕達に無縁の盛氣樓だ。随つて學問自身も亦、其の盛氣樓の中で瘦せ細り、一本立ちの出來ないものになつて居る。僕達は學校を救はう、學問を救はう。野蠻なる民衆の手、其れが何時も死にかけたものに生命を吹き込むのだ。

◎設立の趣旨

學問の中央集權的傾向を打破し、地方一般の民衆が其産業に従事しつゝ、自由に大學教育を受くる機會を得んがために、綜合長期の講座を開き、主として文化學的研究を爲し、何人にも公開する事を目的と致します。從來の夏期講習に於ける如く斷片短期的の研究となる事なく統一連續的研究に努め、且つ開講時以外に於ける會員の自學自習の指導にも關與することに努めます。

◎講座の種類及連續年限

一、哲學。哲學史。倫理學。美學。社會學。心理學。宗教學。文學概論。教育學。法學。經濟學。社會政策。の十二講座を開き、三年乃至四年に講義を完了する豫定であります。講座は之を綜合的とし、聽講生はこれを完全に聽講することによつて、統一的に文化學的研究を爲し得る様に致しますが、場合によつては講座を選んで聽講することも出来るように致します。

二、聽講生の産業を顧慮して毎年十月より翌年四月に至る七ヶ月間を一學期とし之に六講座を割り當てゝ開講致します。一講座の開講期間を七日乃至十日間、一日の講義時間を午後六時より十時迄の四時間とし、未了の講義は次期に延長します。なほ聽講生の自學自習を尊重し、此れが指導に適當の方法を講じます。

◎聽講生

一、聽講の申込は每連續年限の始めに於て受付けます。但し聽講生に欠員あるときは中途からの聽講を許すことに致します。

二、讓義を理解しうる各自の自信に信賴して、聽講生の資格に一切の制限を置きません。男女を問はず申込を以て聽講生の資格を得ます。

三、聽講生は次の割合を以て聽講料を負担し、申込の際或は毎學期の始めに納附を求められます。全講座を聽講せらるゝものは

一學期(六回の講義)に付き

金拾五圓

特定の講座を選んで聽講せらるゝものは

一講座一回の講義に付き

金四圓

◎役員

自由大學に次の役員をおさします。

一、講師

自由大學の趣旨に賛せられ講座擔當を諾せられた學者に講師たることを囑託します。

二、理事

講師及全科聽講生の中より選び、自由大學經營に關する主要の事務を協議します。

一、專任理事

理事の中より互選し、自由大學經營に關する一切の事務を擔當します。

一、顧問

自由大學の趣旨に賛せられ其の經營に聲援を與へらるゝ諸士を顧問に推薦します。

◎經費

經費はすべて聽講料を以て支辨し、特志家の寄附金は基本金に積立てることに致します。

◎講師及擔任講座

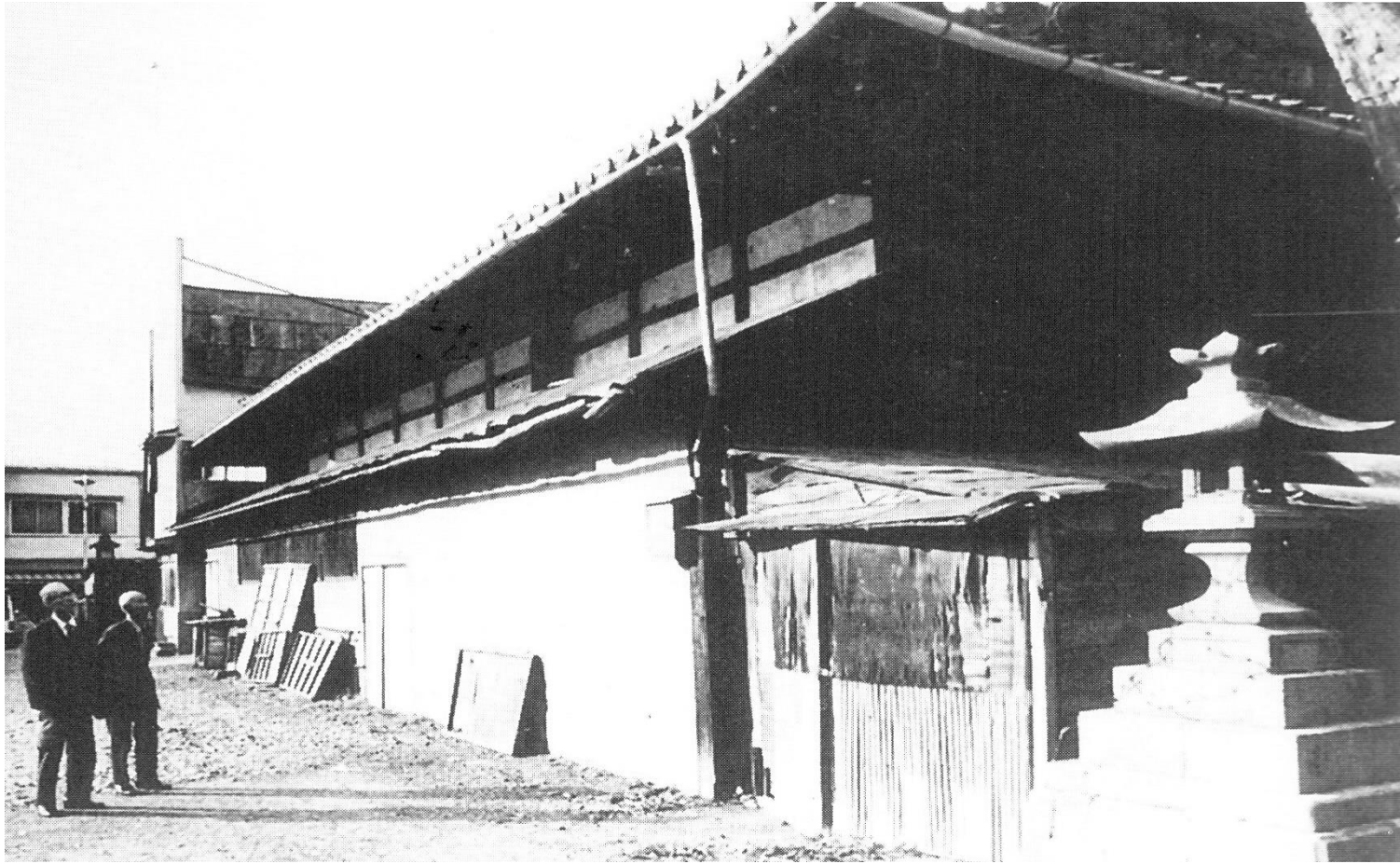
講師たることを快諾せられたるもの及目下交渉中のものは左の如くであります。

哲學概論	文學士	土田	茂氏
文學論	全	高倉	輝氏
法學及經濟學	法學士	恒藤	恭氏
先驗心理學	文學士	務台	理作氏
哲學史	全	三宅	剛一氏
倫理學	全	世良	壽男氏
美學	全	園	賴三氏
社會政策	法學士	三田村	一郎氏
政治學	全	今中	次麿氏

◎開講、及申込の時期

自由大學最初の講座は文學士土田杏村氏の哲學の講義によつて大正十年十月中旬より開かれます。聽講申込書は十月五日迄に自由大學事務所宛にお送りを希ひます。

信濃(上田)自由大学第1回講義会場 伊勢宮神職合議所(上田市横町)



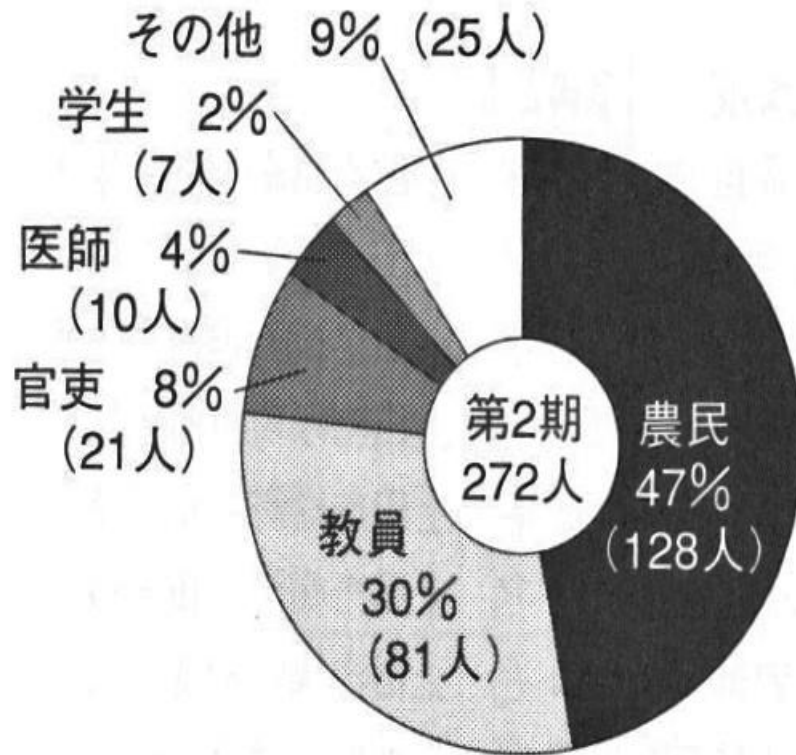
上田自由大学第1・2期の講座

上田自由大学

学期	開講年月日	日数	講師	講座	聴講者数	会場
1	1921.11. 1	7日間	恒藤 恭	法律哲学	56名	上田市横町神職合議所
	1921.12. 1	6日間	タカクラ・テル	文学論	68名	上田市横町神職合議所
	1922. 1.22	7日間	出 隆	哲学史	38名	上田市横町神職合議所
	1922. 2.14	4日間	土田 杏村	哲学概論	58名	上田市横町神職合議所
	1922. 3.26	2日間	世良 寿男	倫理学	35名	上田市横町神職合議所
	1922. 4. 2	5日間	大脇 義一	心理学	31名	上田市横町神職合議所
2	1922.10.14	5日間	土田 杏村	哲学概論	44名	上田市横町神職合議所
	1922.11. 1	5日間	恒藤 恭	法律哲学	47名	県蚕業取締所上田支所
	1922.12. 5	5日間	タカクラ・テル	文学論	63名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 2. 5	5日間	出 隆	哲学史	50名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 3. 9	5日間	山口正太郎	経済学	34名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 4.11	5日間	佐野 勝也	宗教学	34名	県蚕業取締所上田支所
3	1923.11. 5	6日間	中田 邦造	哲学概論		県蚕業取締所上田支所
	1923.11.12	5日間	山口正太郎	経済思想史		県蚕業取締所上田支所
	1923.12. 1	5日間	タカクラ・テル	文学論		県蚕業取締所上田支所
	1924. 3.22	5日間	出 隆	哲学史		県蚕業取締所上田支所
	1924. 3.27	5日間	世良 寿男	倫理学		県蚕業取締所上田支所
	1924. 4. 1	5日間	佐野 勝也	宗教哲学		
4	1924.10.13	5日間	新明 正道	社会学(概論)		上田市役所
	1924.11. 3	5日間	今中 次麿	政治学(国家論)		上田市役所
	1924.11.21	5日間	金子 大栄	仏教概論		上田市役所
	1924.12.10	5日間	タカクラ・テル	文学論		上田市役所
	1925. 3.21	5日間	波多野 鼎	社会思想史		上田市役所
	1925. 3.26	5日間	佐竹 哲雄	哲学概論		上田市役所
5	1925.11. 1	5日間	新明 正道	社会学	21名	
	1925.12. 1	5日間	タカクラ・テル	文学論(フランス文学)	30名	上田市役所
	1925. 1.		谷川 徹三	哲学史		
	1926. 2.		中田 邦造	哲学(西田哲学)		
	1926. 3.		金子 大栄	仏教概論		
	1926. 3.22	5日間	松沢 兼人	社会政策		上田市役所
再建1	1928. 3.14	3日間	タカクラ・テル	日本文学研究	60名	上田図書館
	1928.11.19	3日間	三木 清	経済学に於ける哲学的基礎	25名	上田市海野町公会堂
再建2	1929.12. 6	4日間	タカクラ・テル	日本文学研究	28名	上田市海野町公会堂
	1930. 1.24	3日間	安田徳太郎	精神分析学	44名	上田市海野町公会堂

聴講者職業別数

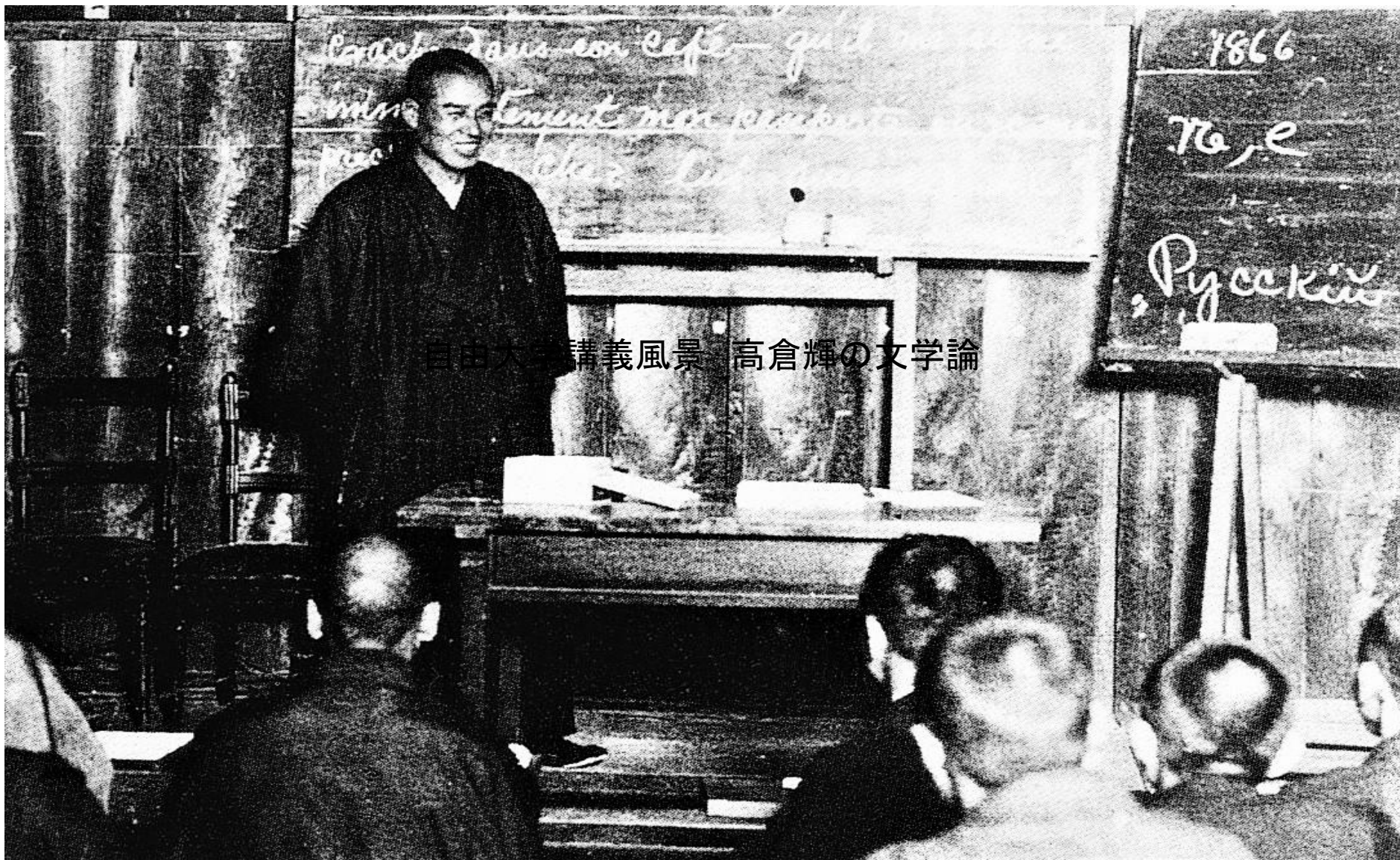
上田自由大学第2期(1922年10月～1923年4月)聴講者職業別数



講義	哲学概論	法律哲学	文学論	哲学史	経済学	宗教学	聴講者延総計
聴講生							
農民	17	23	26	24	22	16	128
教員	14	12	23	17	6	9	81
官吏	5	5	7	2	1	1	21
医師	1	2	2	1	2	2	10
学生	0	0	2	2	0	3	7
その他	7	5	3	4	3	3	25
合計	44	47	63	50	34	34	272

(注)『信濃自由大学の趣旨及内容』(1923年)による。

自由大学講義風景 高倉輝の文学論



自由大学講義風景 高倉輝の文学論

高倉テル講義 中沢鎌太筆記

大正十四年十一月一日

佛蘭西文学

高倉 輝

詩から始める

詩は佛文学の中心

ベルギー

ミラル、ボードレールを中心として近代佛文学を語る。

ミラルの詩から始める。

詩の形式より

ボードレールを中心として佛文学の變遷を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (浪漫派 - 象徴派の発展)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

象徴主義の運動が始まる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (1636-1911)

彼れが詩を著せしレアト、おイテ(詩作)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

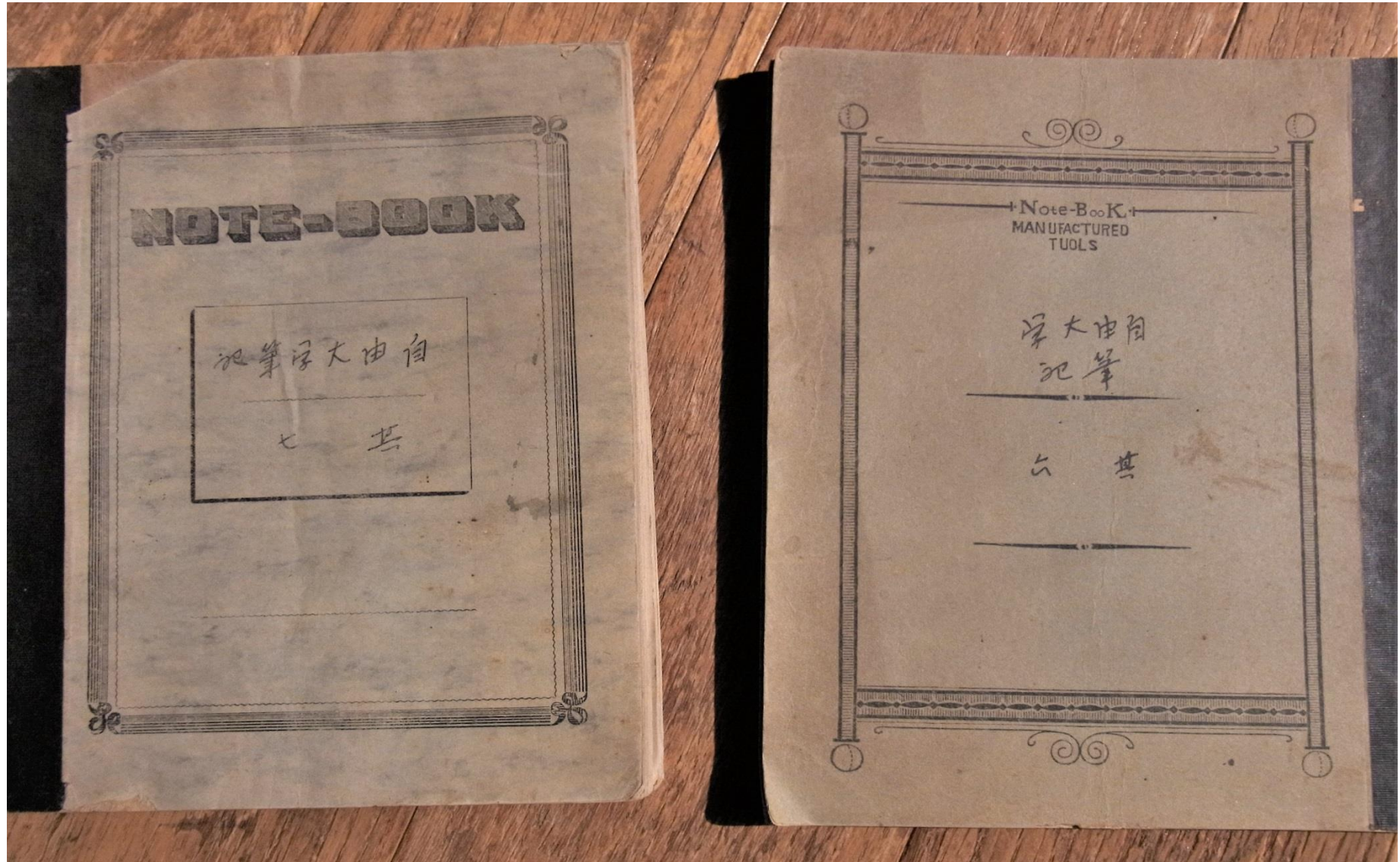
ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

ミラルの詩の運動を概略を述べる

ミラルの詩の運動を概略を述べる (象徴派)

中沢鎌太自由大学筆記



講師の感想 恒藤 恭

信濃自由大學聽講者諸君!!

私は信濃自由大學の第一回講座の擔當の御依頼を受けまして、不才その任に非ざることを知りながら承諾申し上げ、去る十一月一日から六日まで『法律哲學』についての講義をさして頂きました。この書信は第二回の講座の開始に當り皆さんの前でよんで頂くつもりでかくのでありますが、その際、恐らく皆さんは、神職合議所の質素な、とりつくろひのない建物中で、古めかしい机を前にして、疊の上にすわつておいでなのだらうと思ひます。私が初めてその建物の中にはいつたのは、十一月一日、開講の日の午後でしたが、がらんとした天井の下、荒れ果てた疊の上に、聽講の方々があつまつて居られるのを見たとき、少し誇張して申し上げますと、一種悲壯な感にうたれたのでありました。それは多分、眞理と自由とに向つて熱烈な欲求をもつて居る人々と、それを取り巻いてゐる簡素な、うす汚ない建物の内部との對照が、その建物の中にはいつた瞬間に、私の心の眼に、はつきりと映じた爲めではなかつたらうかと、想像して見れば想像されます。

今思ひ出してみると、神職合議所の建物の内部の光景が、そのよるよるの光景が、希望と光明とにみちた會合のイメージとなつて、心にうかんで來ます。世の中には、殊に現在の社會には、外形が華麗であり、宏大であつて、しかも内容が空疎であり、貧弱である計畫や、事業やが、あり餘るほどあつて、われ／＼を失望させ、憤慨させる場合が尠くないのは、まことに残念なことと思ひます。それからみると、信濃自由大學が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひれこさせるやうな形態をとつて生まれ出て、謙遜に、質實に、みづから存在と生長とをはじめたといふことは、それにたづさはる人々の誰れにとつても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか。

「信濃自由大学の趣旨及内容」

大正12年10月

唯私は、皆さんが、信州のために、あたらしく生まれるべき信州の文化のために、信濃自由大学の事業に對して、熱烈な同情と、辛抱づよい興味をもちになり、この事業は、自由大學聽講者の共同の事業であるといふ自覺の下に、この事業が永續してゆき、次第々々にその内容を充實しつつ發展してゆくことに、努力なさることを切望いたします。それはとりもなほさず、日本のための、新しく生まるべき日本の文化のための努力であります。『改造』といふ言葉、『われ／＼の社會を改造せよ』といふ叫びは、誰れも／＼聞きあきるほどききましたが、われ／＼自身がわれ／＼自身の人格を高め、人格の内容をゆたかにし、われ／＼自身の精神的生活をうつ／＼してゆくことに努力しないとしたら、われ／＼の社會の改造が、果していつの日に行はれるてありませうか？

信濃自由大學は、そうしたわれ／＼の社會の改造に向つて、何等かの意味ある貢獻をなさむとする使命をもつた団体だと思ひます。この意味ふかい事業の第二回の試みにおい

猪坂直一(1897-1986)



自由大学のひろがり

県外の大学名	地域	開講年	県内の大学名	開講年
東京市民自由大学	東京	大正二年	信濃(上田)自由大学	大正一〇年
魚沼自由大学	新潟県	大正二年	信南(伊那)自由大学	大正三年
八海自由大学	新潟県	大正二年	上伊那自由大学	大正三年
東北自由大学			松本自由大学	大正四年
原の町自由大学	福島県	大正二年	・同人会主催南信自由大学(東筑摩郡)	大正四年
石巻自由大学	宮城県		紫青会主催中信自由大学(東筑摩郡)	大正五年
・北海道自由大学	北海道	大正四年	・須坂町青年会主催自由大学	昭和二年
・青森自由大学	青森県	大正四年	・上伊那中部自由大学	昭和二年
京都自由大学	京都	大正四年	上伊那南部自由大学	昭和二年
(丹波自由大学)			赤穂自由大学『信濃民友時報』昭和四月二〇日	
前橋自由大学	群馬県	大正五年	伊那自由大学千代村支部	昭和二年
川口自由大学	新潟県	大正五年	竜峡支部	昭和三年
但馬自由大学	兵庫県	大正五年	下条支部	昭和四年
			・埴科郡連合青年団主催自由大学	昭和五年
			・篠ノ井自由大学	
			・岡谷自由大学	
			・諏訪自由大学	
			・松原自由大学(南佐久郡)	

表 県内外に設置された自由大学

(注) 原則として開講が記録されているものを上げましたが、各種文献や研究上で取り上げられているものもここに記載しました。

・印は、開講が決定されたり報道されましたが、開講の有無が判明や断定しがたいものです。

梓啓

漸く春のけはいの感ぜらるる様になりました

さて市存じのことは思いますが、上田自由大学は、かつて四年間わが地方文化市
發のために南講され、私共の啓發さるゝ所多大だつたのでありますが、その後二
年間種々の都合により中止の状態でありました。その後再興希望の方多く
よりより話題に上つたのでありますが、今度機漸く熟し、こゝに再び南講す
ることとなりました。何せ繼續会員によりこの維持発展し得ることとござい
ます故何卒市助力市讃成下さいまして改めて正会員として市加入願いと
うございます。暫定規約といたしましては毎年十一月から翌年三月まで
に三回内五回の講座をひらいて、主として文化科学について聴講研
究いたしたく、会費は年額五円として之を三回に分納していただく様に
いたしたいと思ふのであります。(臨時会員には一講座二円負担していただきます)
つきましては市一回講座を左によつて南講いたしたいと思ひますが、市知
人多数市誘ひ合せの上市出席願いたく、初日に市一回納入会金二円市持
参下します様願ひ上げます

規約その他の更正は市一回講座南講の際市相談願いたく存じます

一市一回講座期日 昭和三年三月十四、十五、十六の三日間

一市一回午後六時半より

一講師 高倉輝先生

一科目 日本文学研究

一場所 上田市新参町 上田図書館極上

尚正会員中とは神川中学校内堀込義雄宛来、十三日に願います

昭和三年三月四日

石井清司

細田延一郎

猪坂直一

堀込義雄

山浦國久

上田市本

様

上田自由大學趣意書

開講の趣旨

國に「學問の中央集權的傾向を打破し、地方一般の民衆がその職業に従事しつつ、自由に大學教育を受ける機會を得んがため」といふ趣旨の下に上田自由大學を創立し、大正十年以後約十ヶ年に亘り學費を基礎として文化科學一般の開講を致しましたが、一時中絶して今日に至りました。時あたかも我國は敗戦の悲境に際會して、國民生活は破局に瀕し、民心の動向には深憂すべきものが認められます。よつて吾々はこゝに郷土の先賢の創設になる自由大學を復興し、科學的社會教育の機關をつくることに致しました。

この度の敗戦によつて吾々は日本人の國民としての民度が如何に低いかとはつきりと知り、意々自由大學の使命の重かつ大なる事を知りました。今後の我國は戰前と對照的な組織となるべく吾々個人の自由が擴張せられることとなります。上田自由大學はその地方一般人の進徳と知識の向上とを目的とするは勿論この教育趣旨を國內各地に及し、以て民衆の向上を期するものであります。

開講の課程

講 座	講 師	講 座	講 師
政治學 (大教授)	大内 兵衛	農業經營學 (大教授)	吉岡 金市
社會學 (元大教授)	風早 八十二	農業經濟學 (元大教授)	山田 勝太郎
經濟學 (元大教授)	宇野 弘藏	農 業 (大教授)	近藤 義男
農 學 (元大教授)	服部 英太郎	農 業 (大教授)	新八郎
農 學 (元大教授)	高橋 正雄	農業機械化 (岡山農學院)	橋本 隆治
民主主義思想史 (大教授)	平野 義太郎	文 學 論	高倉 ナル
史的唯物論 (元大教授)	河上 肇	演劇映畫論	土方 與志
教育學 (元大教授)	城戸 健太郎	中國革命史	久保 榮
日本社會史 (元大教授)	山田 健太郎	婦人問題	松本 慎一
日本古代史 (元大教授)	細津 正志	國語國字論	羽仁 說子
明治維新史 (元大教授)	羽仁 五郎	アメリカ發展史	高木 定
日本農業史 (大教授)	土屋 喬雄		

開講の時期

開講生の募集と開講して大體次の如くに開講致します。

十月、十一月、十二月、一月、二月、三月、四月

以上各月内に二乃至三講座を開講し、其の講義を翌年度に延長します。

開講の年 限

講座の開かれて居ない期間の開講生の自學自習を尊重し、此れが指導に適當の方策を講じます。

一講座は三年乃至四年を以て終る事にします。

長期継続の講座の外に、別に短期に完結する教講座を並立した講習會を開く事もあります。

自由大學經營の經費は聴講料及び寄付金を以て此れに充てます。

聴講料を免除し得る各自の自信に信頼して、聴講生の資格に一切の制限を設かず、且身たる女たることを問ひません。單に申込を以て聴講生の資格を得ます。

本學十二月より開講し、開學年中に少くも五乃至十講座を開講し、翌學年度より更にその數を増加する運びに致したいと思ひます。

經費の一部を補助して、將來聴講の自由を附与せらる可き宿舍を設け以て聴講と聴講生との關係の密接を計り、更に聴講の爲の授合をも設けずるに至りたい豫定です。

高上せしめんが爲に、全國の青年と提携する事を努めます。

昭和二十年十二月二十日

上田自由大學

講座	講師	講座	講師
財政学	東大教授 大内兵衛	日本農業史	京大教授 土屋喬雄
社会政策	元九大教授 風早八十二	農業経営学	倉澤孝典 吉岡金市
同右	東北大教授 宇野弘蔵	農業経済学	元京大助教授 山田勝太郎
経済学	東北大教授 服部英太郎	3 農業経営	京大教授 近藤康男
同右	九大助教授 高橋正雄	農業機械化	栃木県筑波村長 前橋新八郎
1 民主主義思想史	東大教授 平野義太郎	文学論	岡山縣野村農務主 橋本鑑治
史的唯物論	元京大教授 河上肇	演劇映画論	高倉テル
2 同右	岡邦男	同右	土方与志
教育学	元法大教授 城戸幡太郎	中国革命史	久保栄
日本社会史	京大教授 山田盛太郎	婦人問題	松本慎一
日本古代史	京大助教授 祢津正志	国語国字論	羽仁説子
明治維新史	元日大教授 羽仁五郎	アメリカ発達史	高木卓 未定

表 復興上田自由大学の講座および講師一覧

(注) 数字は、「上田自由大学創立準備案」と相違しているところでは、「上田自由大学趣意書」では講師名に上がっていません。3は「農業技術」となっています。

年月日	講師	講座名	回数	会場など
一九四五(昭二〇)	高倉テル	文学論	第一講座	鷹匠町公会堂
一二二七	平野義太郎	民主主義思想史	第二講座	*二 一五商工経済会
二一七	高倉テル	文学論	第三講座	*五一
五四	山田盛太郎	農業経済	第四講座	*五一四
五二六	平野義太郎	(民主主義思想史)	第五講座	
六三〇	大内兵衛	(財政学)	第六講座	
八一	羽仁五郎	(明治維新史)	第七講座	
九八	風早八十二	資本論解説	第八講座	商経上田支部階上
九二九	祢津正志	(日本古代史)	第九講座	羽仁説子
一一一〇				

表 復興上田自由大学講座一覧

(注) () 内は、予定講座名

* 印は、講座開講日 (会計簿の年月日は聴講料記載日)

自由大学運動3羽鳥

表 1 3 人の履歴概要

	金井正	山越脩蔵	猪坂直一
出生地	神川村国分	神川村国分	上田町横町
生没年	1886.12.5 ~ 1955.8.10	1894.4.25 ~ 1990.1.9	1897.8.11 ~ 1986.12.3
兄弟姉妹	3 人の男兄弟の三男	6 人の兄弟姉妹の六男	2 人の兄弟姉妹の長男
家 業	蚕種業	蚕種業	蚕種販売仲買商
卒業学校	上田中学 (現上田高等学校)	上田中学 (現上田高等学校)	小県蚕業 (現上田東高等学校) から上田蚕糸専門学校 (現信州大学繊維学部)
自由大学 開講時年齢	35 歳	27 歳	24 歳
類似点	家庭環境が酷似している。末っ子 (実質、長男的存在) 蚕種関係、金井と山越は同窓生、近隣、強い学習意欲		長男

表 2 正業 (家業) 外の活動事項

	金井正	山越脩蔵	猪坂直一
戦前	児童自由画 山本鼎	児童自由画 山本鼎	
	農民美術	農民美術	
	哲学講習会 西田幾多郎 田辺元 土田杏村	哲学講習会 土田杏村	
		小県立憲青年団	
	自由大学	自由大学 土田杏村	信濃黎明会 自由大学の運営
戦後	ミチューリン (山越の「開拓」を支持)	ミチューリン 開拓	『民主々義の精神』 (1947) で民主主義思想の受け止め方、『枯れた二枝』(1967) で社会教育の大切さ

参考文献

猪坂直一著『回想・枯れた二枝 信濃黎明会と
上田自由大学』上田市民文化懇話会 1967年
『上田市誌』「生涯学習と文化活動」2001年
『上田市誌』「新しい社会を求めて」2002年
小平千文・中野光・村山隆編著『上田自由
大学と青年たち』 2004年
長野大学編『上田自由大学とその周辺』2006年
『自由大学運動の遺産と継承—90周年記念集
会の報告—』2012年など